

北 列ヨ

Lee Yangji 李良枝



ナビ・タリョン

い やん じ
李良枝

© Yangji Lee 1989

1989年3月15日第1刷発行



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫第一出版部あてにお願
いいたします。(庫一)

ISBN4-06-184450-4 (0)

李良枝

目次

ナビ・タリヨン

かずきめ

刻

読後に

辻
章

三三

一五

九五

七

ナビ・タリョン

本書は『かすきめ』（『かすきめ』『ナヒ・タリヨノ』収録、一九八三年九月刊）、
『刻』（一九八五年二月刊）を一冊にまとめて文庫版にしたものです。

ナビ・タリョン

一
ダイヤルを回す指先がふるえる。指先を穴に押しあてるようにしても何故か心細く離れてしまふ。私はダイヤルが戻り終わらないうちに受話器を置いた。溜息をつきながら両手を受話器の上に重ねる。

夕闇が迫っていた。イルミネーションが点滅し始めている。人々は焼けたトタンの上を歩くような足どりで、昼間は色褪せていた路地の奥に消えていく。並んでいる建物の配置は変わっていない。時差の違う国から今、帰って来たばかりのような戸惑いと懐しさが身体中の血管で泡立ち、私は重心を失っている。辺りを見回し、また思い直して受話器をとる。記憶している番号に間違いはないはずだった。二年間という時間の表皮が覆っていても七つの数字はなじみ深い一つの音節として反芻できる。呼び出し音が耳もとで鳴り始めた。ほろ苦いものが胸の奥に広がっていく。目のやり場に困った私は自分の靴先ばかりを見、靴先も居心地悪く視線をかわすように、バッグの横腹をこすり始めた。バッグの中には着古した下着とブラウスが数枚入っているだけだ。他の荷物はみんな紙袋に押し込んで京都駅のゴミ箱に棄ててきた。酔漢が吐き散らした薄茶色の液体が乾いてこびりついているコンクリートの上に、小人のような浮浪者が背を丸めて寝ていた。その横でカップ酒を囲んで車座していた男たち。その中の一人が私の仕草をじっと見ていた。私は明らかに自分の意志で紙袋を棄てたのだ。

「もしもし」

太い声。哲ちゃんの声だ。思わず受話器を握り返すその手で自分の声を掴み出すように私は言った。

「もしもし、哲ちゃん？」

「もしもし……あつ愛子か？」

「うん」

「帰って来たのか」

「うん、私、元気よ」

「バカ、そりゃこっちが訊くセリフだよ」

「うん」

「おまえ、今、どこにいるんだ」

「うん」

「おい、どこなんだよ」

「紀伊国屋の前」

「そうか、待ってろ、すぐ行くから」

「うん」

「絶対にそこを動くなよ」

「うん、帰って来たんだもの、私」

「そうか……元氣だったか」

「哲ちゃんは？」

「オレは相変わらずさ、悪い妹を持つと苦勞する」

「うん」

「よし、すぐ行くからな」

哲ちゃんが電話を切ったあとも、私はしばらく受話器を握っていた。ツ、ツ、という音を聞いて我に返ると電話を切りバッグを取り上げた。バッグの横腹が汚れていた。

「心配かけさせやがって」

人ごみの中から哲ちゃんが現われたかと思うと百キロの大きな身体が近づいてきて私の肩を叩いた。私はただ両肩をすくめた。哲ちゃんの大きな胸に片手を入れて寄りかかたくなる。だがさつきから腋の下が妙にこそばゆい。再会、邂逅という場面で、突然舞台上に上がらせられたしろうとのように、観る者も演ずる者も氣恥ずかしうつつ向いてしまうこそばゆさだ。

ビルの急な階段を降り、ジャズスナックの鉄製の扉を開ける。店いっぱいにはサックスの音が溢れ、鉄のパイプで装飾された壁や天井が音の勢いでしななって見えた。隅のボックスに向かい合って座っても私は視線をできるだけ合わせないように下を向き、哲ちゃんもせわし気にジンのポトルを頼んでカウンターの方ばかり見ていた。腋の下がまだこそばゆい。視界の隅で哲ちゃんが、ジンは本来生で飲むものなんだと言いながら私のグラスにトニックを混ぜた。

「そうか、二年たったんだよな」

「うん」

正視することができない私は、ポロシャツが伸びきった哲ちゃんのおなかの上に視線をもたれかけさせた。

「おい、乾杯だ」

「いろいろ……ごめんね、哲ちゃん」

哲ちゃんの顔が真近に迫る。喉が急に熱くなった。

「哲ちゃん、顔色悪くなったね」

「そうかな」

「まだ血圧高いの？ 相変わらず薬ばかり飲んでるんですよ」

哲ちゃんはグラスを持ったまま、指先で眼鏡のはしを押えた。

「おまえこそ、まっ白な顔してるぜ、まるで穴ぐらにいたみたいだ」

「……穴ぐらみたいなのところだったもの。……陽にあたることなんて滅多になかった」

「辛かったか？」

「ううん、別に」

「オレ、おまえが家を出てったあと、おまえの顔写真持って京都中の旅館を捜し回ったんだぜ」

「ほんとう？ どうして私のいたところに来なかったの？」

「そんなことわかんないよ、通り過ぎちまったのかな」

オスカー・ピーターソンのピアノがじりじりと擦られながら流れていた。音は灰色にたちこめた煙草のけむりの中を這いまわる。二人とも黙った。ジンの酔いと音の中に二年振りに逢うぎちなさを消していこうとするように。

「哲ちゃん」

「なんだ」

「みんな……元氣？」

「ああ、もうすぐ……地裁の判決だ」

一瞬にして二年間の隔りは消え、暗室の扉が音をたてて開いた。どうしても開けなければならぬ扉だった。

「愛子、もう逃げるなよな」

ぎゅっと胸が締めつけられて哲ちゃんを見上げる。唇を曲げて笑おうとすると目尻までがひきつった。

「そう……で、どっちが勝つかな」

「もしかしたらオヤジだぜ」

「どうしてよ」

そう訊かれることを予期していたように哲ちゃんは口を嚙み、ボトルに手を伸ばした。グラスに注ぎ入れると氷を突つつくようにしてかき回す。

「ねえ、どうしてよ」

「オレ、証人になったんだ。オヤジ、名証言だったって大喜びしてるよ」

「なんて子供、ひどい話ね」

「ひどいよ、わかってるよ、でもしょうがなかったんだよな」

「……………」

「それにおまえが家出したことでオフクロはますます不利になったんだぜ」

「どうして。オヤジが悪いんじゃないの」

「いや、母親の教育がなってないから長女が家出したってことになってる」

「オヤジがそういうふうにもっていったのね。あのY弁護士じゃあやりかねないもの、汚いな、また逃げたくなった」

そう言いながら哲ちゃんに甘えて八つ当りしているような自分の言い方が不愉快になって、私は指でグラスの中の氷を突ついた。

「よせよ、逃げるなよ。道子は、ずっとおまえのかわりに苦勞したんだぜ。妹のことを考えてやれよ、しかたないじゃないか、親なんだから」

「親、か」

私はテーブルの下に置いてあったバッグを蹴った。

「哲ちゃん、私、家から逃げて京都に行ってそれでまた京都から逃げて来たんだ」

「そうだろ、どこに行ったらって同じ。同じことなんだよ、逃げてても逃げてても逃げられない」

私は答えなかった。身体が熱くなり、めまいがしてカウンターの上のランプが幾重にもぼやけ

て見えた。

「おい、酔ったか、もう飲むな、おまえはまだ未成年なんだから」

「平気よ、ただちよつと思ひ出しただけ」

哲ちゃんの顔、オーティス・レディングに似ている。もう少し痩せてサングラスをかけて――。

「哲ちゃん、私ね、京都にいてある日、自分の生活には音がないなって気づいた。それでシアンクレールという店に行ったのよ。大雪の日だった」

「ああ、有名な店だ」

「音はすてきだった」

「すてきだよ」

「……ねえ哲ちゃん、やっぱり私たちは逃げられないのかな」

「もうその話はやめようぜ」

「だって……」

「決まってるじゃないか、逃げられっこないよ、オレたちは子供なんだから、あの二人の」

「子供、か」

ジントニックを一気に飲みほす。気づくとボトルの中のジンは半分に減っていた。

「哲ちゃん、ところで和男にいちゃんは どうしてるの？」

「元氣そうだぜ」

ラムプの横に和男兄ののっぺりとした顔が浮かんできた。兄二人は父方に、私と妹は母方につ

いた形で別居し、自閉的な和男兄はいつの間にか家自体からも一線をひいて暮らすようになっていた。たまに逢って両親の裁判経過を報告する時も兄はつまらなそうに頷くだけだった。だが、ラムプの横に現われた兄はあの日のように突然、堰を切ったように話し始めた。「愛し合っていないけりやあ、さっぱりと別れちまえばいいものを。こんなに長く裁判してぐずぐずしているところを見るとひよつとしてあいつら、まだ愛し合っているんじゃないか、子供にばっか迷惑かけさせやがって。勝手に生んどいて、たまには子供の言う通りにすりやあいんだよ」

ラムプを見つめる自分の顔が火照り出す。愛し合う——。もう長い間、忘れていて思いを寄せることもなかった言葉だ。和男兄の仕事は年がら年じゅうキャベツを刻むことだった。一つの職場に居ついて次第に責任を持たされるようになるのとすぐにそこを辞め、次の職場でまた糸のようにキャベツを刻み始める。辞めるたびにキャベツの糸はますます細くなっていった。

「ねえ、和男にいちちゃんには欲がないの？　いつまでもキャベツ専門じゃあつまらないじゃない？」

ある時、私がそう訊くと和男兄はくぐもった声で面倒臭そうに答えた。

「オレ、人の上に立って命令したりするのいやなんだ」

哲ちゃんがぼそりと言った。

「オレ、長男やめたいよ、なんで長男なんか生まれちゃったのかな」
ラムプから目を離して私はグラスを持った。